「風につれなき」　─中世の擬古物語

17年度　龍谷大学

★　左の文章は、鎌倉時代に成立した物語『風につれなき』の一節である。の娘である中宮は、の子である若宮（若君）を出産後、急逝した。大臣が宇治の別邸で亡き中宮の法要を行っている間、姫君（中宮の妹）は都の大臣邸で悲しみに暮れ、帝からの慰めの手紙にも返事ができなかった。その後の成り行きを記した左の文章を読んで、後の問いに答えよ。

　の音も常より殊にあはれに聞こえて、木の葉吹きまく風の音も気色も、頼むなく心細き古里の庭は、涙の残りあらじとらし添へふに、より御文あり。夕べの空の色したる色紙に、

　　我が袖の涙を空の時雨にてはらふあらしもいかにのもと

　思ひやり聞こゆるもなう心細きを、ただ今の御返りなからむこそ、いと憂かるべけれとあるに、我が身ひとつに悲しと思ひつるほど、同じ御心なりけるもあはれなるに、内の大臣の上なども、「いかが」とせちにすすめ聞こえ給へば、のにほのかに書きなし給ふ。

　　①かき暗す涙時雨のふる里にまがふも悲し松のみどりご

とばかり聞こえ給へるを、あはれなる中にうち返し御覧じおどろかるる書き様なり。

　はかなく過ぐる月日にて、御四十九日も果てぬれば、若宮の御恋しさは悲しみにも紛れざりけるにや、大臣で給ふ。この度ばかりこそ都の方見めとせば、立ち出で給ふにも、なほしあるにやと、我ながらつらくて、道すがら流るる御涙をひあへ給はず。②御年に二つこそあまり給へば、③盛りにきよらににほひ給へりし人の、それともなう影のやうになり給へるしもぞ、あてにかはらかに懐かしげなる御様を、めづらしと見奉り給ふにも、姫君は日頃の恋しさに、せきあへず悲しと思したり。

　若宮を見奉り給ふに、さらに御目もりがりて、さだかにも見奉り給はず。しひて拭ひ隠して見奉り給ふに、さらにただ人とおぼえさせ給はず。今から気高くやむごとなき御光さへ添ひて、など賢う心恥づかしげに、おそろしきまでおはしますに、行く末頼もしく、中宮の御ため、なき御後までもいみじき御光なりとしく思されて、「今は」とこの世を思し捨つるには、姫君のいたうせ給へるの、いよいよ美しうねびまさり給へる心地して、にほひらうたげなる様に、寄る方なう世を心細しと思したるに、待ちつけて嬉しげに思ひ給へるを振り捨てむ、またいと悲しけれど、「この世ながらの別れ、ことの数ならず。いとせめて恋しからむ時は、迎へても見聞こえてむ」と、一筋に思しなしつれば、よろづ心やすくて。

　をば左の大臣に譲り聞こえて、し給ふべきよし申させ給ふを、帝「さらにあるべきことならず。中宮の御事を思ひ聞こえ給はむにつけても、若宮の人とならせ給はむ様を、心やすく見おき給ひてこそ思し立ため。また昔の御形見ともをか見るべき。なかなかにかへりて心浅く恨めしき御心なり。④亡きにも、宮の御事をこそ後ろめたしと思しおきけめ」など、度々さひのたまはすれど、「さらにこればかりはのかたくとも、まるべきならず。限りある道をば、国王も惜しみ止めさせ給ふことなし。この世の悲しび⑤これに過ぎたることあるまじ。家の栄えは極めてき。かばかり天の下祈り願はれさせ給へる一の宮、我が家に生まれおはしまして、思ひのごとく君のありき。⑥家の風口惜しく、末の世の名の惜しかるべきならず。大臣の位にて多くの年、世の政をつことなかりき。時のの御親として、出で入りの御かしづきにつけて、たしく見奉りても過ぎにき。若君つひに世をたもち治めおはしまさむこと疑ひあるべき御様ならず。伝はらむ名はとてもかくても今は同じことなり。その上には世のさをあながちに思ひ知りにし身の、今までつれなくながらへて、つひにかかる悲しびにまどひぬ。しひて同じ様にて身を惜しまむこと、いと疎ましかるべし。誰も誰も公私、我をあはれと思さむ人々は、この姫君を代はりとは見給ひて、心細くて過ぐし給はむをとぶらひ給へ」。

（注）

○我が袖の……いかに木のもと＝私の袖を濡らす悲しみの涙が、空の時雨となって降るが、木々を吹き巻く風はどれほど木の葉を吹き散らしているだろうか、子の若宮はどんな様子だろうか。

○内の大臣の上＝姫君の義理のにあたる人物。

○浅縹の薄様＝薄い藍色をした薄手の和紙。

○現し心＝正気。

○あてにかはらかに＝上品でさっぱりとして。

○御眼居＝お目元。

○美しうねびまさり給へる心地して＝美しく成長なさった感じがして。

○左の大臣＝大臣の弟である左大臣殿。

○家の風＝我が家の威風。

○世の儚さをあながちに思ひ知りにし身の＝早くに妻を亡くし、世の儚さをしかと思い知った自分が。

問１　傍線部①「かき暗す……」の和歌の説明として、適当でないものを一つ選べ。

１　「かき暗す」には、今の暗い空模様と、姉の中宮を亡くした悲しみに沈む姫君の気持ちとが重ねられている。

２　「ふる里」の「ふる」には、「古」と、雨がふる、涙が流れ落ちるという意味の「降る」が掛けられている。

３　「まがふも悲し」とは、生まれたばかりの若宮の世話をたった一人でしなければならないのも悲しいという意味である。

４　「松のみどりご」の「松」とは長寿の象徴であり、若宮のこれからの人生が長く続くものであることを意味している。

問２　傍線部②「御年四十歳に二つこそあまり給へば」の現代語訳として、最も適当なものを一つ選べ。

１　お年は三十八歳でいらっしゃるので

２　お年は四十二歳でいらっしゃるので

３　お年は四十四歳でいらっしゃるので

４　お年は八十歳でいらっしゃるので

問３　傍線部③「盛りにきよらににほひ給へりし人の」の「し」と同じ意味の助動詞を一つ選べ。

１　紅の花にしあらば衣手に染めつけ持ちて行くべく思ほゆ

２　三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなも隠さふべしや

３　秋の田のほにこそ人を恋ひざらめなどか心に忘れしもせず

４　つらかりし多くの年は忘られて一夜の夢をあはれとぞ見し

問４　傍線部④「亡き御影にも、宮の御事をこそ後ろめたしと思しおきけめ」の解釈として、最も適当なものを一つ選べ。

１　私は死んだ後も、あなたのことを本当に薄情な人だと思うことでしょうよ。

２　私が死んだ後も、若宮のことだけは支えて欲しいと思っていますのに。

３　亡くなった中宮も、あなたのことをとても頼みに思っていたでしょうに。

４　亡くなった中宮も、若宮のことばかりを気がかりに思っていたようですよ。

問５　傍線部⑤「これ」とは、どのようなことか。最も適当なものを一つ選べ。

１　出家するのを止められること。

２　我が子に先立たれること。

３　帝の宣旨に従えないこと。

４　帝の力にも限界があること。

　問６　傍線部⑥「家の風口惜しく、末の世の名の惜しかるべきならず」は、大臣の出家に際しての思いであるが、大臣はそのように思う理由をいくつか述べている。それに当てはまるものを一つ選べ。

１　天の神々が願ったとおり、中宮が帝の子供の中でも最も優れた子を生んだから。

２　自分が大臣の位にあった間、政務を執る際に一度も過ちを犯したことがないから。

３　中宮の親として、誇らしい顔をして宮中に出入りすることができたから。

４　娘の中宮が生んだ若宮が、次の皇太子となり、帝として即位することが正式に決定したから。

問７　本文の内容と合致するものを一つ選べ。

１　大臣は、中宮の死を悲しみつつも、若宮に会いたい気持ちを抑え切れず、四十九日の法要が終わると会いに出かけた。

２　大臣は若宮に会った時、あまりに気高く光り輝くその姿に目がくらんでしまい、はっきりと見ることができなかった。

３　大臣は、姫君を見捨てて出家することを悲しく思ったが、きっと誰かが彼女を迎えて面倒を見てくれるだろうと思った。

４　大臣は人々に、自分の代わりに心細く暮らしている姫君を見舞って、彼女と一緒に中宮の後世を弔ってほしいと頼んだ。

問８　『風につれなき』は鎌倉時代に成立した作品であるが、それより前の時代に成立した作品を一つ選べ。

１　『建礼門院右京大夫集』　　２　『宇治拾遺物語』

３　『春雨物語』　　　　　　　４　『和漢朗詠集』

【解答】

問１　３

問２　２

問３　４

問４　４

問５　２

問６　２

問７　１

問８　４

【現代語訳】

　時雨の音も（姉を亡くしたために）いつもよりも殊更にしみじみと悲しく聞こえて、木の葉を巻いて吹く風の音もその様子も、頼りとする父（関白殿）もいなくて心細い古里の庭では、涙の残りもあるまいと（思われるほど、姫君が涙で袖を）濡らしていらっしゃるときに、帝からお手紙が届く。夕方の空の色をした色紙に、  
　　　（帝）私の袖（を濡らす）悲しみの涙が空の時雨となって降るが、その

　　時雨をはらうように吹く嵐によってどれほど木の葉を吹き散らしているだ

　　ろうか、母親（中宮）は亡くなってその時雨をはらって子を守る役割の人

　　はいないだろうが、子の若宮はどんな様子だろうか。

　（心中を）思いやり申し上げるにつけても、（自分も）今までに経験がないほど心細いので、すぐにご返事がないとしたら、本当につらいに違いないと書いてあるので、自分一人だけが悲しいと思っていた時に、（帝が）同じお気持ちであったことも心にしみるが、（義理の伯母にあたる）内大臣の北の方なども、「どうだろうか（、ご返事しないのも失礼では…、返事をするべきです）」としきりにお勧め申し上げなさるので、薄い藍色をした薄手の和紙に（墨の色も）ことさらかすかに書きつけなさる。

　　　（姫君）（私が）悲しみにくれて流す涙のように時雨が降るこの古里で、

　　私を母君と間違えるのも悲しいことだ。松のようにこれから末長く成長す

　　る若君が。

とだけお返事申し上げなさったが、（帝は）悲しみの中にも繰り返しご覧になり自然と目も覚めるような（姫君の素晴らしい）書きぶりであった。

　あっけなく過ぎゆく月日で、四十九日（のご法要）も終わったので、若宮（に会いたいという）恋しさは（娘の中宮を失った）悲しみにも紛れなかったのだろうか、大臣が（都へ）お出かけになる。今一度だけ都の様子を見てこようとお思いになるので、（宇治の院を）お立ちになるが、（その時にも、）それでもやはり正気が残っているのかと、自分ながらにつらくて、（京への）道中流れるお涙を止めることができなさらない。（関白殿は）お年は四十二歳でいらっしゃるので、男盛りで美しくつややかでいらっしゃった人が、その人ともわからない影のように（生気をうし）なっていらっしゃったのが、（かえって）上品でさっぱりとして親しみが感じられるご様子であるのを、めったにないことだとご覧になるにつけても、姫君は日頃の恋しさに、涙をこらえきれずに悲しいと思いなさっている。

　（関白殿は、）若宮を拝見なさると、すっかり（涙で）目も霧にふさがれるようになって、はっきりと拝見なさることもできない。無理に涙を拭き隠して拝見なさると、（若君は）全く普通の皇子とは思われなさらない。（生まれてすぐの）今から（すでに）気品が有り高貴な輝かしさまでも加わって、お目元などは利発でこちらが気後れするほど立派で、圧倒されるほどの様子でいらっしゃるので、将来が頼もしく、中宮の御ために、（中宮が）亡き後までもすばらしい（我が家の頼みの）光であると嬉しく思われなさって、「今（こそ）は（出家をしよう）」とこの世をお思い捨てなさるにつけては、姫君のとても面やつれなさったお顔立ちが、ますます美しく成長なさった感じがして、華やかでかわいらしいご様子で、頼りどころなく世の中を心細いと感じていらっしゃるところに、（ちょうど父関白がお帰りになったのを）待ち受けて嬉しそうに思っていらっしゃるのを振り捨て（て出家す）るようなのは、またとても悲しいけれど、「この世にいながら（出家して）の別れは、（死別に比べて）ものの数ではない。たいそうつらく恋しく思われるようなときは、お迎えしてきっとお世話申しあげよう」と、ひたすらに（出家を）ご決心なさったので、万事気が楽に（おなりになった）。

　（関白殿は）関白の位を（弟の）左大臣にお譲り申し上げて、出家なさるつもりである旨を帝に申し上げなさると、帝は「決してあってはならない。中宮の御ことを思い申し上げなさるにつけても、若宮がご成人なさる様子を、これで安心だと見届けなさってから決心なさるのがよい。また（関白が出家して会えなくなれば）中宮の形見として（私は）どなたを見たら良いのか。（悲しみで何もかも捨てて出家なさるのは、）本当にかえって心根が浅く恨めしいお考えである。亡き中宮も、若宮の御ことばかりを気がかりに思いなさっていたのだろう」などと、（帝が）何度も繰り返し（反対の意向を）おっしゃるけれど、「決してこの出家だけは幾度もの（制止の）勅命が強くても、やめることはできない。人がいつかは死ぬ宿命を、国王といっても惜しんでお止めになることはできない。この世の悲しみの中で、これ（＝我が子に先立たれる悲しさ）にまさるものはあるまい。我が家の威風は極めた。これほど天下の人々みなに（誕生を）、祈り願われなさった今上帝の第一皇子が、我が家に生まれなさって、（私の）願いどおりに今上帝の（我が家への見舞いの）お出ましもあった。（我が）家の威風に心残りがあるはずはなく、後世（からどう思われるか）の名を惜しまなければいけない状態ではない。（私も）大臣の位で多くの年月（を過ごしたが）、政務の舵取りを誤ることはなかった。当代の中宮の御親として、参内退出のお世話の折には、誇らしげに（それを）拝見して過ごしても来た。（この）若宮が最終的に（即位なさり）世をお治めなさることは疑念をはさまねばならないご様子ではない。（後世に）伝わるような名はどうであれこうであれ、今では同じことだ。その昔には（早くに妻を亡くし、）世の儚さをしかと思い知った自分が、今まで無情にも生きながらえて、ついにこのような（娘の死という）悲しみに心乱れてしまった。ことさら前と同じように（在俗のままに）我が身を惜しむようなことは、本当に未練がましいに違いない。誰も誰も公私につけて、私のことを気の毒だと思いなさるような方々は、この（妹の）姫君を（私の）代わりとお思いなさって、心細い様子でお過ごしになるような姫君をお見舞いください」（とお頼みになる）。